

## 夏が終わり，創造の秋へ

校長 清水 哲也

夜 9 時を過ぎても日中のように明るかったルーマニアも少しずつ日が短くなり，吹く風も秋めいてきました。45° という緯度の高さやサマータイムの効果を改めて実感した夏でした。赤道付近の国々で真上から差し込む太陽光線は刺すように強烈ですが，ルーマニアは南中高度が低いためやや穏やかに感じます。

学校では，5 週間の夏休みが終わり授業が再開しました。残念ながら 1 名転出したため 5 名でのスタートとなりましたが，「楽しい夏休みでしたか？」という問いへの答えは「日焼けした笑顔」だけで十分すぎるほどでした。

いくつかの教科から夏休みの宿題が出ていましたが，小学生の理科の宿題は自由研究でした。理科を学んでいる二人とも休み前の授業で計画を立ててはりきっていました。

隆吉君は，段ボールを使ってボードゲームを作り上げました。二段構造になっていて，穴から落ちたボールにも得点が入りません。感心したのは，ボールをはじく最も難しい部分に洗濯ばさみを使うことを思いついたことです。はじく強さを自由に変えるような仕組みを作り上げ，他にも多くの工夫がみられた力作でした。いくつかの改良箇所も見つかり，次の作品にそれが生かされるのが楽しみです。

さっそく隆吉君と 5 ラウンドまで対決しました。大人としてのプライドをもって真剣に戦ったのですが，残念ながら大敗してしまいました。

マリアさんは，マシュマロとレンジを使った実験を計画していました。加える水の量を何段階かに設定し，それぞれ加熱時間を変えてマシュマロの変化を比較する予定でした。なぜか 1 回目で予定時間の何倍も加熱してしまい，容器を焦げ付かせたためそこで中断という結果になったそうです。ぜひ再挑戦したいという意気込みに感心し，その結果を期待して待っています。

日常生活の中で浮かぶ子供なりの疑問や不思議だなという感覚，自由な発想やアイデアはとても貴重です。様々な事象への疑問は，追究への大切なモチベーションとなり，そのあとの活動の支えとなります。身の回りのものや学校で教わったことであってもそれを当たり前と考えず，時には疑ってみることも必要かもしれません。

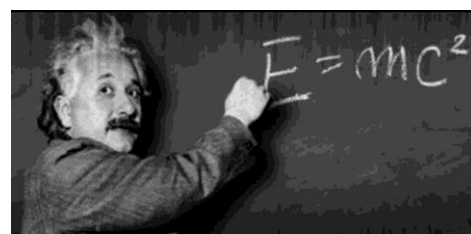
私が物理学への道を選んだのは，中学生の時に読んだ「アルベルト・アインシュタイン」の『特殊相対性理論』に関する本でした。その理論は「光の速さで別の光を追いかけても，やはり光の速さに見える」などニュートン力学を根底から覆し，人類の世界観を一変させました。それまで絶対的だった時間や空間が伸び縮みすることを明らかにし，書かれていることのほんの一部しか理解できない当時の私をワクワクさせました。

20 世紀の最も偉大な科学者であることを誰もが認める「アインシュタイン」ですが，フランス語という苦手科目があったことや歴史や地理の点数が悪く志望校に入れなかったなどというエピソードは，天才の中の人間らしい一面を垣間見ることができます。

機会を見て，「アインシュタイン」の人柄や業績，相対性理論の初歩，タイムマシンはどうやったら作れるのかなどについて子供たちに話ができたらと思っています。



隆吉くんの力作



アルベルト・アインシュタイン